



TITLE:

(随想)昭和36年度の地方会に出席して

AUTHOR(S):

稲田, 務

---

CITATION:

稲田, 務. (随想)昭和36年度の地方会に出席して. 泌尿器科紀要 1961, 7(12): 1011-1012

ISSUE DATE:

1961-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112238>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 7 巻 第 12 号

昭和 36 年 12 月

## 随 想

### 昭和36年度の地方会に出席して

京都大学教授 稲 田 務

昭和36年度には 中部 東部 西日本の3つの泌尿器科地方会に出席すると云う幸福を私は 得ることが出来た。その印象記を 気軽に記してみようと思う。

中部は岐阜医大の担当で 会長は近藤厚教授に決定していたが 同教授は4月から長崎大学教授に転任せられ 後任の後藤薫教授が着任せられたのは7月であるから 同教授には学会の準備はたいへんであつた事と思う 9月16日午後に役員会 次で会長招待の長良川鵜飼見物の予定であつたが 丁度その日に第二室戸台風が近畿地方を襲つたのである。もう列車は止まり始めたが やつと動いたのに乗りこんで京都を出発したが 守山駅で立ち止まり 台風の過ぎるのを待つたが そのまま夜となり 遅くなつて辛うじて京都へ逆戻りした。翌朝は岐阜との連絡は出来ぬまま とに角 京都駅を8時頃に出発して昼過ぎに岐阜へ到着した。学会は出席者の少いままでも朝から開始されていたのは良かった。ただ後藤教授の特別講演 須山教授(法医学)の精液に関する招請講演を聞き得なかつたのは 遺憾であつた。午後は約100名程の参会者であつた。名古屋大学の映画による研究は独壇場と云える。麻酔に就ての京大麻酔科稲本教授の招請講演は適切なものであつた。一般演題は7分 5分の2種に分けられ予定の30題は殆ど講演せられた。これは朝からどしどし進行させていたおかげである。腎性高血圧 人工腎 レノグラム 白昼迅速レ線現像法 前立腺癌の病理 等の注目すべき演説の他に 興味ある症例が多数に報告せられた。唯 質疑 討論が少くてやや低調のように思われた。濁流の長良川を前にした懇親会場のホテルの庭にて鵜匠の実演を見物した。新任の後藤教授には ややお気の毒な学会であつたが 学問的には充分に意義のあるものであつた。次回は奈良医大である。

東部地方会は10月6—7日 東北大学にて穴戸教授の下に行われた。私は5日朝に京都を発つて夜に仙台に着いたが 小雨にて寒かつた。6日午前科学研究班会議あり 午後松島の観光 4時シンポジウム「前立腺肥大症」が行われた。約200名の参会者であつた。手術々式を中心として述べられ 出血を少なくする方法も討議せられた。題目が一般的のものであるから 聴衆からの発言も活潑であり 時間を超過する程であつた。シンポジウムの題目はなるべく一般的のものがよいと思われた。同夜の懇親会も盛会であつた。7日は8時から午後3時20分まで一般演説が53題演説せられた。演説時間が3 5 6 7分と区別せられており そのため多数の演説を行う事が出来たと思う 副腎疾患 腎生検 腎盂特殊撮影法等の他に 種々の興味ある症例が多数報告せられた。追加発言も活潑であつた。東北大病理の諏訪教授の特別講演「腎の急性循環障害の病理学」は 見事な組織標本写真と流暢な弁舌によつて 同教授の最も得意とせられる所を述べられた。シンポジウム「急性腎不全の治療」

は人工腎を主とし、その他に腹膜灌流法、胃腸管灌流法等に就て論じられた。この領域に於ける今後のものも考慮せられた。学会は設備万端申し分なく盛会裡に終了した。私は昭和14年の学会にて当市に来て森の都と云う印象を受けたが、今回は戦災のためにその風情がなかった。その代りに街路は広く、人も車も伸び伸びと見えた。次回は東京通信病院である。8日は2台のバスを連ねて吾妻裏磐梯観光であつた。天候にも恵まれ、既に美しい紅葉を見る事が出来た。世話係の御苦勞に感謝しつつ猪苗代湖のほとりにて解散した。

西日本地方会は10月21日、22日に久留米市にて布施博士の下に行われた。21日午後、特別講演「腎血流と高血圧に関する実験的研究」が久大、後藤講師によつて行われた。腎静脈狭窄を行つた点に大きな意義があり、努力的な実験が行われた事に敬意を表わしたい。会衆は約250名。次で重松教授の外遊中の写真が示された。同夜懇親会が行われ、珍らしい地方芸能が披露せられた。22日午前一般演説20題が行われた。男子不妊症、尿管緊張低下症、特異な腎結核、経静脈性腎動脈造影法等に就て活発な討論が行われ、その他に興味ある症例が多数報告せられた。会場の設備、会の進行等に申し分はなかつた。天候にも恵まれた。当市は嘗ては軍都として栄えたが、戦後は文化都市として立つて行こうとしている。特にブリジストンが文化的施設に貢献している様が見られる。大学病院も立派である。然し大きな学会は従来殆ど行われなかつたとの事で、今回の学会は市当局からも大いに歓迎せられたようである。次回は松山市との事。学会からは23日に阿蘇観光が行われたが、私は22日の学会終了後に耶馬溪へ廻つたが、奇岩に薄紅葉の風情が印象的であつた。

以上3学会に出席して、得る所多く、やはり学会には出来るだけ出席したいものだと思うた。学問的な事は別として、少しく雑感を付け加えてみよう。

先ず学会の名称であるが、日本泌尿器科学会第12回中部連合地方会と称するが、この中で連合の字は必ずしも必要ではないと思う。殊に中部の場合には日本皮膚科学会も併記せられているので、連合の意味が、ぼんやりする。西日本の場合には、中部や東部と、やや趣きを異にし、第13回西日本皮膚科泌尿器科連合地方会となつている。中部と東部は日本泌尿器科学会の地方会であるが、西日本はその点異つているようである。連合の意味は、この場合には更に不鮮明である。また雑誌「皮膚と泌尿」は西日本地方会の機関誌となつているが、この事から特殊の事情が生じているようである。

東部は地域が広く、大学の数も多い。東京都内だけでも10程あり、大病院も多い。西日本は地域は広いが、大学の数は10である。中部は地域は最も狭いが、大学の数は14である。こんな点も各地方会の活気に関係があるであろう。地域の配分を改める事は容易ではないが、それが必要か不必要かに就て考えてみる事も全く無用ではないと思う。

泌尿器科と皮膚科とを別個に行ふ事は、私としては賛成であるが、東部のように、両科が独立している大学や大病院がたくさんあるならば、それも出来るが、中部のようにそんな大学や病院の少い地域では、今の所それも困難な次第である。

主催地の歓待を受けたり、観光の世話をして貰うのは相すまぬ事であるが、各地のめづらしい風物に接するのはよいリクリエーションであり、同学諸氏と旧交を温めるのも楽しい事である。

今年の3地方会は輝く成果を挙げて終了した。来年は一層の進歩と諸氏の健容に接する事を期待する。